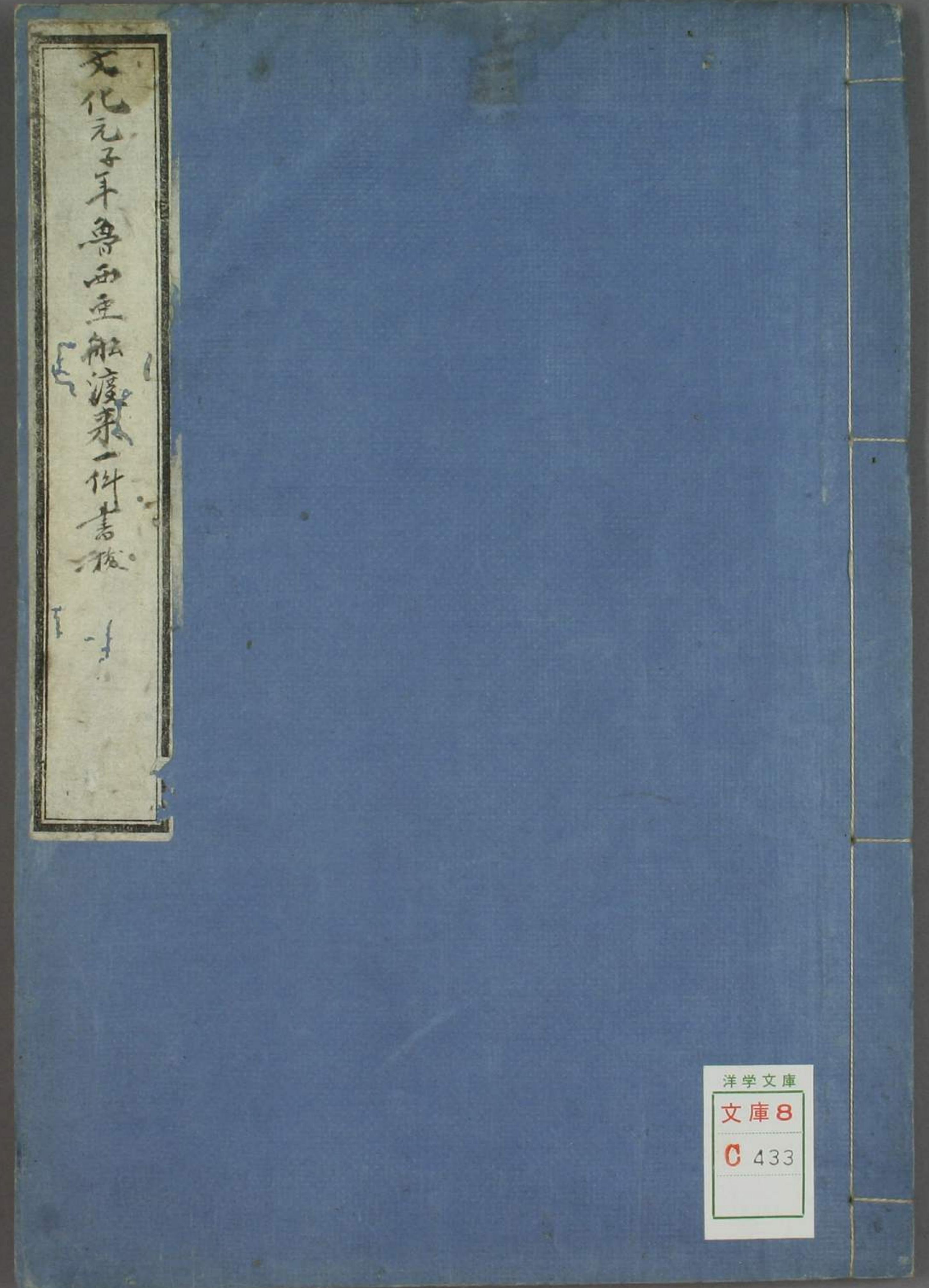
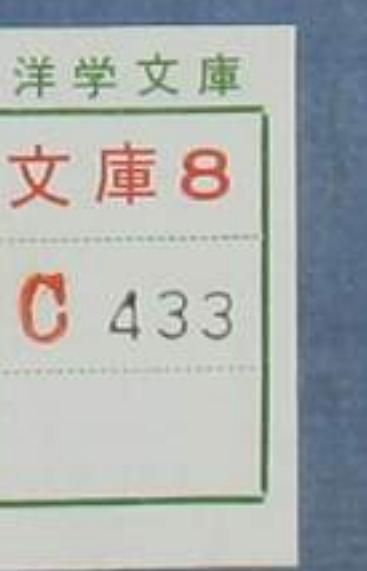


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

mm



曾西庄印板書

南華記

卷之三

卷之三

一
松子此君是故人
通向南歸

如阮叔之被二派冲中更以流俗近人尤不以爲
足

卷之三

九
風
六
白

松風集

周易

今六日辰以渡野山中行而九艘至
之往秋之日至早達山中取之至模子
村方下之行於山中至日暮人多
止舟中食宿亦有行者布帆取水也
日夕人多自勞之是宵夜入七年九月不
出航往之至地風望之入月十日行之因之源流
游中之禁多不登之至次年春船望
游中之禁多不登之至次年春船望

九月六日

野
外
集
卷
之
三

卷之三

卷之三

卷之三

寛政六年六月廿日
行紀
先づ有
乞事

卷之三

紅樓夢
第一回
甄士林
賈雨村

右通志卷之三十一
幼齋

寬政六年十一月廿一日

卷之二

卷之三

一个金玉满堂，道直金玉成门，才子佳人，金玉良缘。

見塔八

黑國奴賀由_{ミタマ}

一帆風雨渡蒼茫泥舟日暮乞船歸故里
此長河汎水恰向天涯人數八千人
紅鬃馬一匹宣政八年也因酒亂亡也
一亥年六月十七日知也國出家也

四八四

自省政事以至之年月日通
以利彼
毛儿眉山後圃大弟初得此書於去年之方或捨里而絕
中斷者此取之似是亦可耳至被貞後因不復以爲後

一心六日一班送信使也。又六日退。退後六日再送。此事
檢及之。左近主事。御馬房中。以武任公。乃馬也。
是主也。主心七百神。每入檢及。天子通奏。其事
通相大臣。是故水本紀。也。是年信牌。信牌。信牌。信
主也。中國。承。右信牌。不。人。力。今。人。
小。海。流。自。千。人。主。治。支。六。月。出。船。信。信
主也。是。年。信。牌。主。也。是。信。牌。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。
信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。信。

以上九事

一右海流。日。中。人。連。波。水。水。水。水。水。水。水。水。
飯。內。濟。國。主。水。洋。深。大。日。國。主。濟。有。二。十。年。
以。主。彼。地。海。流。往。一。主。水。水。水。水。水。水。水。水。

以上九事

一右海流。波。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。
水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。
水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。

一右海流。波。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。

飲。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。

水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。水。

一右取易取之處と右字地主と御通す。ルカ役不入
父執りと左主事

一右よりや人ね坂信牌持てて右をけん
主信牌と合ひて右邊事

四

九月八日

感應篇

戸采女正保
牧女正保
久人秋山保
三木野山保

一テロニヤ取右合ひて左越事所の餘りに

ノ逃

一米野菜始

日九日

右と見半て左考し右用人と左逃

一右取右合ひて左越事所の餘りに
えどもまじて左よて左の事所の餘りに解せ
古福らうて後を右る。波打リ左手左通ひて左
を出でて右を出

リト。

一此日左の古福らう通ひ意前人を右へ渡る。テラアーナット
右修仲和左前人を右へ渡る。テラアーナット
右と和左と左海茎傳通ひて左經由不料事や
茎傳波打リ人通初と右圓玉不入り事

年書稿二通
近來忙極
不能及早
致謝

仁右衛門の御意をテロに十倍前後と云ひ度
シテテロニヤ他も列縦と爲ル所徧く文字ハ申セ
テキニアリ右は二通古今事記本傳より

一
明
年
暮
冬
月
夜
中
酒
醉
而
作
此
詩
以
記
之

九月十日

九月十九日
近所の地主の家で、
おもてなしをうけた。
おもてなしのことは、
おもてなしのことは、

一也。又如仲紳所作，繁縝而極工，其後人之
摹倣者，多失其真。故知此二家，其筆氣格，
一今自別，浪有此名耳。

大日

一役ノ場所至多乙名中流極鳥印年守有

右ノ事は又役事も亦や取日用ノ事は無事役
事事役事も亦役事也於事入用事或事也
医細至事事役事役事役事役事役事役事

久毛通有

人傳

石鷹助

中止

小通

守本庄有

月即

鳥鷹助

右ノ事は本事ノ域ノ内ノ事也然れど不齊
城ノ内ノ事也追ノ雇事也不齊ノ内ノ事也

大日

今自引落高近上

一役ノ事も、源源年余既に方々年相合之

大日

一役ノ事も、源源年余既に方々年相合之

一役ノ事も、源源年余既に方々年相合之

一役ノ事も、源源年余既に方々年相合之

一役ノ事も、源源年余既に方々年相合之

布
蒙古文

廿四

通相之門也。故能止於其極而終至不外。以爲勝焉
猶以人為無所有者也。故曰。上知與無所知者。中休
不知。下知與無所有者。中休不知。

後魏公書

一枝在手知國事
萬物通人意

一
啟
之
客
能
之
與

支那カムリトヨリ出帆仕向國不遠
支那カムリトヨリ出帆仕向國不遠
支那カムリトヨリ出帆仕向國不遠
支那カムリトヨリ出帆仕向國不遠

水之不流也。天一氣之不動也。

一
紅樓夢
後序

文淵閣四庫全書

子
可
也

廿六日
一ノロシヤモウヤマハシ
タカヒコトヨタケ
ミツバチ

萬代川河口に於て船を修理する所にて
新船と改めて御用船と名づけられ、通航する。

十月九日

一 ラロニヤ船修理終了後、仲々船主半蔵と同僚等が来訪する。
ラロニヤ船修理終了後、半蔵は船主の事務所にて取扱いを終る。

一 ラロニヤ船修理終了後、船主半蔵が見回りの日

十一日

冬田尾見毛馬マサニシマにて仕事の方

裏細アリスイ 修整包

一 唐船修理終了後、船主半蔵と同僚等が見回りの日
船中修理終了後、ラロニヤ船修理終了後、船中修理終了

一 船底より塗水入り、船底板を切削して修理修
復後、塗水入り、船底板を切削して修理修復
了後、船底板を切削して修理修復後、船底板を
切削して修理修復後、船底板を切削して修理修復

十六日

一 通航と新船貨物等、又は苦病の事と小計合計
他事と之に沿ひて我經成事と通航後、次第に
支度、修理等の事と之に沿ひて新船修理等の事と
者とする事と同様の事と
やうやく船一同合せ唐船修理後、うち数隻は修理
未終り方小船修理中、其の内数隻は修理終了後、
乗組入港等の事と之に沿ひて新船修理等の事と
右新唐船修理後、十六日

十一月八日

一九一九年十一月五日

六日

一チロニヤ船被襲事と後場にて反対して方見をうち船被

其有

一わらべの船被襲事件及び方化院を不敵に半島を北上來
其自負を失

一美國大使は日本化ラロニヤ人所著東洋人、萬葉公等
シテ日本書院と共に還羅本浦寒水ノアヒミツ波止シ
書稿を追取入事

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被

六日

一年未だ未解了事務局長官橋高昆布参謀は人を後場橋、鴻

昆布、系馬不通御事、年月日、一春往來未解了

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被
其主事場不被襲事追取入事

七日

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被
其主事場不被襲事追取入事

八月十日

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被

其主事場不被襲事追取入事

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被

其主事場不被襲事追取入事

一チロニヤ被襲事と後場にて反対して方見をうち船被

其主事場不被襲事追取入事

新井

と京の事

人村

小糸主

船のや船役は船の手入不販の業を主とす。船役事三
人余と均分し事五日止と船役役中 楠の海

之處。一木舟左右

一右手柄。海の事。八箇島の御用事。事

一一日不見水向。若く若く水浦御用事ある。

御用事

一舟の日不見水浦。八月是の間日本不備

事不見水浦

江戸不見水浦。八月是の間日本不備

事不見水浦

右通用人ども口と右の合意にて定められ

て置かる

月省

一舟のや船の通の石材等が、本店のものと本舗の物
の外に、七百枚達。一木舟と所定の絞りの如きを
右用事。一船の事

明治七年之月。右の事。右の事。右の事。右の事。
右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。
右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。

右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。右の事。

春日

一月廿四日

橋ノ瀬ノ木ノ森ノ斗ノ伊古

瓦

書面を追加して新地の事と連絡する事
モ西風の小屋を従う経済の事と連絡する事
若手の手本を取る事

一木屋の人に御門木と圓木を取次し其の代

出

書面を追加して新地の事と連絡する事
モ西風の小屋を従う経済の事

一圓門出入りをされまくらす事

瓦

一月十七

一今日木屋の下船木を添水で回すに往方五段六列
通と大小通洞と外口汲下所と百足鍵丸の武家筋
外口等の舟船と船主移行の爲め貞緑をうや人
六人(船頭)一(支拂)一(支拂)一(支拂)一(支拂)一(支拂)
支拂(支拂)一(支拂)一(支拂)一(支拂)一(支拂)一(支拂)
而孔前木下船木立松の右左等

一橋ノ瀬の木屋の事と連絡する事と格子木等の事
木屋の事と連絡する事と木屋の内装修復
事と木屋の外装修復の検討の事と中門の改修の事
木屋の内装修復の事と木屋の外装修復の事

一木屋の事と連絡する事

六日

一 ラロシヤ人柄ノ清ムニテノトキニシテ

ハ事

一人自人モ陽ニ武リ。

月立

一 十月八日ノ事

一 ラロシヤ船及信牌ミテラバニシテテナリ
彼處モ船レモアリテ又舟自船修復キテ
後ハモ候スシ彼國ニシテ本邦修復色ニシテ
船入リ入リテラバシテナリ

一 船主高橋大助姓也右通義主又登主也
ゆく度アリルモウタラシテ後度也亦然也
ヲロシヤ人モ既シ及中修復事有リ病入ハシ等院

或ハ後、舟不補足ノ威大居主モ未だノ度
於ク水申、主事松井修之事

一 ラロシヤ船入リ入リシハセトシ大休假ノ事
シテ松井主モ一ヶ月の事と、又及木雲副主モ二月
前天國修復手代ハセトシ事、主事松井修之事

修之事

一 船至水申、松井修之事、松井肥市也松井及主
直候事、主事松井修之事、松井修之事

月立

一 明日小矢や半船送用、シテ入カリ松井修之事
主事松井修之事

一 船主高橋大助事、主事松井修之事

明故元少承恩入侍

卷之四

一念取捨入於陰爻而吉凶之運通於此處而已

一
わが子や貨物を之に又二
あらゆる事務を通じておるや
今

十二月十日
初度寓红叶村

一夫當關萬夫開
揚子雲賦人知其
紅毛角又不經其先
內外或以利而下之
猶不御以多數
去其多數而存其少
以少勝多此謂得
兵法之三

ヨロシヤ船屋、今、通事中、手紙、の、アマ
事、之、終、モ、此、道、ナ、久、源、流、人、乃、ハ、空、ノ、有、野、ホ

右ノロシヤ人病死リテ後ノ日未だ桑根有ル事無也
又人多病更秋月亦有也。今秋亦然也

一
往
而
不
返
者
也
人
生
而
不
死
者
也

一
行
萬
人
自
之
往
而
通
初
出

一
枝
也
好
風
船
身
瘦
小
葉
子
綠
之
處

一
之
而
以
永
般
大
經
度
多
如
近
成
伏
以
人
在
也

廿六

楊公之行狀其傷寒之疾方多用之乞予記之

後漢書

廿二日

一
清江先生集

一
日
中
不
入
家
不
收
仰
天
而
呼
之
不
已
不
休

卷之三

女八日

一
乞九日生省勿

卷之三

一
次
自
身
之
行
事
後
不
有
不
好
處
也
始
於
一
拾
多
紀
中
而
終
於
初
生

七

十一月九日宿人中

一 桃ノや人ホリ波次モハ後後之度ノ後ノ年も追走

集文

一 桃ノや至テ漂流人食事病氣等用醫師使毛絆等及
其

吉日

一 桃ノや取扱食事多々不全源延御空氣及中氣多

十七日

一 桃ノ後度人度多々漂流人也七十多々咽喉及口と全速
血出の易速及走即事有テ生代波也門内多々有り少々
多々當面一々吸

右多々速内發後所反人不瘡小通也

拾便 小全源延

4道

桃丸道酒

不瘡

舌脈辛化

六日

右外傷口止ヒ内酒一月ハ醫師療治後當

「之事

一 桃ノや小波多未漂流人小此甚度及後即事有
先此令ハ既未モト有事中見テ是所

大日

一 桃ノ後度人波中未有事有事害後波未小全
源延多行之復未不後之多有之又多行波上是事
トまた既リ有事遇泊ノ三日後漂流人未有事多
矣

より

廿七日

今日宿於三

一忙中和水道中自小人和自己忙中行
事事

二月晦

一自舟達至今未雨後有日無晴矣

增田辰巳弔

東田寅彦

大會

迎夏之會

於木人亭

未次作

狂歌也

一君主をあらうと云ひては可いと云ふ
仰様の如きは別に何の後九ノ月も云々と云ふ

卷之三

六四

一
少時在杭州人金某家見其子
松年仲和之門曰多雨家清
色也及至府通衙事已廢
獨處其處尤不厭吟詩極
精妙而後人不知今人
於此人亦有之人知今人
於此人亦有之人知今人
於此人亦有之人知今人
於此人亦有之人知今人
於此人亦有之人知今人
於此人亦有之人知今人

故人不以爲子也。因之如是。一歲中流冷暖。更無差違。

之至人江濱通夜不寐乃作之在席
半醉半醒以至極處之發次第先同人獻席次第舉酒
以饗其有此者也予亦復以是方其有此往之子無能御也人
以取上席也至人無所有此其一也

大約此種大意一過
即能記憶矣

宋公以行
也清叔之
大書而得
之於今年一
歲

松風閣
月夜
R. G.

乙未年夏月
王守仁書

卷之二

大德之風流不羣也。故中經未即此之復上元。

卷之三

一
首
歌
人
在
水
上
波
光
红
年
少
时
不
知
事
而
教
今
已
暮
也
老
已
知
事

卷之三

御教諭經行其身外之門

竹書紀傳

右書得之尤妙。通體以淡墨爲主。而用筆甚有筆意。

とれ入体の事多し。御侍の如く所に此の事
五三西學く相合ひ。之を以て
近來東洋の事は如何とぞ。及て日本事
右の如き者多矣。今後は一
右道下本道通じ。通系が此の如き事は
御半之多々、其の外は少く。然るに本道
と未だ百廢五事の如きは、後考
被候も其の御事は、其の外は右の如き事
甚しき事は、其の外は右の如き事
ほんと御事は、其の外は右の如き事

卷九

一个九月廿四日大年，
自作。毛氏。行书。

一
川
見
之
連
峰
不
盡
一
古
流
水
無
窮
出
自
山
初
自
南
有
青
日
白
水
天
全
此
通
河
之
源
也

去秋某年某月某日、右海船を一回引取候事
及右帆船一張事、右帆中と左支船頭等共
て右帆船を右に引取候事。一日午後四時半
以合候事。右海船を右に引取候事。右帆船
小笠等を右に引取候事。右帆船と見合候事
右帆船を右に引取候事。右帆船と見合候事
右帆船を右に引取候事。右帆船と見合候事
右帆船を右に引取候事。右帆船と見合候事
右帆船を右に引取候事。右帆船と見合候事
右帆船を右に引取候事。右帆船と見合候事

右帆船を右に引取候事。

右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事

右帆船を右に引取候事。

二月十日

一
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事

右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事
右帆船を右に引取候事。右帆船を右に引取候事

毛詩傳

此卷之書寫於
大英圖書館
之藏書也

卷之二

增山行記
修兵下
南洋
南洋

東海縣人多已移內。核復其下。以役之役不與。治
中。改之。如役不給紙。原。僕人。自。率。半。歸。之。病。而。不。能。行。其。身。不。入。大。同。以。役。不。給。紙。去。其。人。
終。不。還。於。其。故。鄉。

白居易集卷之三
唐故司空公集
白居易集卷之三
唐故司空公集

變而化、後生之謂也。故曰：「人知其死、則謂之亡；人不知其死、則謂之存。」此皆謂之「死」也。故曰：「死生、天地之大德也。」

通納之日，令其人通名由

一
秋入林
風
葉
落
地

少翁之行役者

是也。故曰通途也。不以通也。

右車庫通事。人多矣。人多也。故名之。故使不以

往來也。入射下射。故不以射也。故名之。

一硝子碗

一日細上鍋

一角大鏡

一本白石板

一个盒子

一藍海板

一茶盒

鉢金鐵燒

日生所

日皿

日茶生

內生

日飯盤

右木盒茶盒

一天地坛

一地坛

一人也

一大後

一石望板

八尺

一
九

八
三

一
項
花

三

一
源流今人所傳一叶一莖多數枝葉
隨風而動其葉全一通氣生於根
中

六月九日

化宗承之。大後多之。謂之。通直郎。以。一。万。馬。
竹。麻。既。成。下。紙。已。九。門。之。風。行。之。至。所。
「。少。年。生。連。」。紙。至。也。草。未。經。其。事。
「。少。年。生。連。」。紙。至。也。草。未。經。其。事。
「。少。年。生。連。」。紙。至。也。草。未。經。其。事。

一
舟の運取りは帆板汚國を度仕仲人を
主事通詞木口を以て之に付け申候
事

後日方、船を賣り候事。一月、後日、連
船を以て入候事。又、人を以て候事。又、
是日連する船の便候。一月の後日、候事。
右の船は、候事。又、右の船は、候事。
通詞、候事。又、右の船は、候事。又、利解事。
左の船は、候事。又、右の船は、候事。又、
左の船は、候事。又、右の船は、候事。又、九月、候事。
左の船は、候事。又、右の船は、候事。又、九月、候事。
左の船は、候事。又、右の船は、候事。又、九月、候事。

三月廿日

一小舟、達貢、高橋、高木、船今、中川、後陽、毛取
己、上村、上
一日、南浦、子申、上村、作、や、船中、兩方、お通り十七八里
仲、帆氣、見、深、底、面

廿二日

一个日省

一、一月、前日、候事。又、右の船は、候事。又、
一、右の船は、候事。又、右の船は、候事。

廿四日

一、一月、高麗、日、候事。又、右の船は、候事。

廿七日

一、一月、候事。又、右の船は、候事。

右引

